

児童の自主的な読書を促す多読教材の開発

Developing Extensive Reading Materials to Motivate Elementary School Students
to Read Autonomously

黒江 理恵*¹

要 旨

本研究では、児童が自主的に読書に取り組めるようになることを目指し、日本語教育における多読の手法を用いて、ICTを活用した小学校低学年の多読活動のための教材開発とその実施モデルの提案を行った。具体的には、週に1回図書室での読書時間において多読活動を行い、読書記録の作成やOPACの検索指導を取り入れることで、読書に対する意欲向上と読書の習慣化を図る教材と実施モデルを提案した。多読活動では、児童は教師による図書選択の支援が受けられる状況で、各自のペースで読書を行い、視覚情報に重きを置いた読書記録を作成することが重要である。このような活動は、視覚優位の教材活用の点において、通常学級において学習スタイルに特徴を持つ自閉スペクトラム症の児童がいた場合でも実施が可能だと考える。

Keywords : 読書, ICT, 多読, 小学校低学年, TEACCH
reading, ICT, extensive reading, elementary school lower graders, TEACCH

1. はじめに

平成29年告示の小学校学習指導要領解説の国語編では、「学びに向かう力、人間性など」に関する目標に「読書をする事」が系統的に示されている。第1学年及び第2学年では楽しんで読書をする事、第3学年及び第4学年では幅広く読書をする事、第5学年及び第6学年では進んで読書をする事、とある(p.15)。このことから、小学校において教師には児童が自主的に読書に取り組めるようになるよう指導することが求められていることがわかる。児童が自主的に読書に取り組めるようになるためには、読書に対する意欲向上と読書の習慣づけが重要であると考えられる。

しかしながら、国語科の授業では児童に習得させたい知識や技能があるため、国語科教科書に掲載されるものは限定的にならざるを得ず、国語科の時間だけでは一人の作者の多様な作品に触れることは難しい。また、国語科の授業においては児童全員の理解度を確認しながら教材を丁寧に読んでいくという指導がなされており、自主的な読書活動を推進する手立てが別途必要であると言える。

そこで、児童の自主的な読書活動の指導を補う方法として、日本語教育において学習者のモチベーションに対して効果が期待されている多読活動に注目したい。多読は英語教育や

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

日本語教育など第二言語の習得を目指す言語教育で行われてきた活動で、多くの本を読むことでインプット量を増やし言語習得を促す学習活動である。基本的に、学習者は辞書がなくても読めるレベルで興味がある本を選び、授業において一人一人異なる本を読んでいく。学習者はわからないところを飛ばして読むことで、本全体のストーリーを理解し、本の世界を楽しむという経験をする。二宮・川上（2012）も、多読活動は学習者の内発的動機づけを促進する環境であると考察している。

読書の習慣がつくようになるには、自分で次にどのような本を選んだらよいかを考え、調べられることが前提となる。学習指導要領では「学校図書館などを目的をもって計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること。その際、本などの種類や配置、探し方について指導するなど、児童が必要な本などを選ぶことができるよう配慮すること（p.40）」としている。そこで、オンライン蔵書目録検索システム（Online Public Access Catalog：以下、OPACとする）の活用注目する。将来児童が目的に応じて本を選択できるようになるには、小学校において、教員や司書などによって選ばれた図書館所蔵の本の中から検索し選択するという過程を経ることが重要であると考えられる。

以上のことから、本研究では、日本語教育における多読の手法を用いて、小学校低学年を対象とした ICT を活用した多読活動の教材を開発することを目的とする。

2. 先行研究の検討

中央教育審議会答申では、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあり、語彙量を増やしたり語彙力を伸ばしたりする指導として読書活動の充実の必要性を指摘している（p.132）。つまり、小学校低学年において児童に読書の楽しみを見出させ、読書を習慣化させることが重要だと考える。

小学校入学以前は、幼稚園や保育園、家庭での読み聞かせが主だった小学校低学年の児童にとって、一人で読むようになるには何らかの支援が必要となるだろう。平成 30 年の「子どもの読書活動の推進に関する有識者会議論点まとめ」では、小学校低学年の児童の傾向として、「本の読み聞かせを聞くだけでなく、一人で本を読もうとするようになり、語彙の量が増え、文字で表された場面や情景をイメージするようになる」としている。このことから、児童が一人でも読めるように文字やイラストなどのバランスが考慮された本を紹介するという支援の方法が考えられる。また、様々な読書活動を実践している小学校においても、本に親しんでいない児童には選書に課題があり、ジャンルの偏りが見られ、薄い本ややさしい本を選びがちであったことが明らかにされている（笹倉, 2006, p.38）。そのため、文字やイラストだけでなく、内容においても質のよい本を紹介することが重要だと考える。

近年、日本語教育において多読が実践されるようになってきている（熊田, 2016；作田, 2021；大越, 2023）。多読は、自分の興味がある本を数多く読んでいく活動である。栗野ほか（2012）は、その本の読み方のルールとして、「やさしいレベルから読むこと」、「辞書をひかないで読むこと」、「わからない言葉は飛ばすこと」、「進まなくなったらやめること」の 4

つを挙げている。また、教師の役割を、多読ができるようになるまで一人一人に寄り添って支援することだとしている。例えば、多読用の教材の準備、学習者のレベルや興味に合った本の紹介、読み方へのアドバイスなどである (pp.22-23)。上述した小学校低学年の読書における支援の在り方を考えた際、この多読における教師の役割が参考になると考える。

筆者自身、大学に在籍する日本語学習者に対し多読授業を8年間(前期・後期)担当した経験がある。週に1回90分の授業において、学習者は同じ教室で一斉に多読を行った。筆者は支援者として、学習者のレベルや興味に合う本を準備したり紹介したりし、無理に難しい本を読もうとする学習者にはその本を読むのをやめてレベルのやさしい本に変えるようアドバイスを行った。学習者には一冊読み終えるごとに読書記録(日付、本のタイトル、理解度、おもしろさ、感想)の作成を課し、一週間ごとに提出させた。読書記録作成により学習者のレベルや興味・関心を持つジャンルなどが把握でき、学習者へのアドバイスの参考資料となった。また、学期が終わった際に何冊読んだかを可視化できることから、学習者のなかには達成感を持ち多読に対して新たな意欲を見せる者もいた。このことから、記録させる内容は検討する必要があるものの、読書記録の作成は読書活動促進の一助となると考えられる。

現在、学校の図書室で本を調べる場合、児童自身でOPACを検索することは少ないが、令和4年に行われた「子供の読書活動の推進等に関する調査研究(電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査)」の調査報告書では、タブレット端末で自校図書室の蔵書検索を可能としたという報告が見られる(p.23)。このことから、今後小学校において環境整備が整い、児童がOPACを利用できるようになれば、学校の図書室だけでなく公立図書館の活用も可能となり、児童が新たな本に出会う場の提供にもつながると考える。そのため、多読活動のなかに児童によるOPAC検索活動を取り入れる。

以上のことから、読書活動の意欲向上と習慣化を目指し、小学校低学年の学校の図書室でのOPAC活用を想定した多読活動を提案する。

3. 多読活動

3.1 事前準備

この多読活動は週1回の図書室での読書の時間に行うことを想定する。

多読活動を行うための環境の準備として、図書室内に多読用図書コーナーを設置し、教科書掲載図書や教科書内で紹介されている図書、課題図書などを置いておく。また、児童が使用できる蔵書検索パソコンを準備しておく。低学年の児童はキーボードを使用した文字入力ができないため、図1のように、画面上に表示されるキーボードをマウスでクリックして文字入力を行うソフトウェアキーボードを導入しておく必要がある。



図1 ソフトウェアキーボードの例（岡山県立図書館）(1)

1冊読んだ後に児童に書かせる読書記録は、紙で2種類準備する。読書記録1（図2）では、児童が本を読んだ後、本のタイトル、読んだ日を文字で書き、本のおもしろさについて丸で囲むようにしている。本のおもしろさについては、その本を読んで「とてもおもしろい」と思った場合には大きな花を、そうでない場合には小さな花を丸で囲むように指示する。今回は低学年の児童を想定しているため、児童が文字で書く内容は限定した。読書記録を書くことに負担を感じさせないようにするためである。

ひづけ	ほんのなまえ	おもしろさ (まるでかこもう)
		 ・ 
		 ・ 
		 ・ 

とてもおもしろいとおもったとき、おおきな  をまるでかこもう。



図2 読書記録1の例



図3 読書記録2の例

読書記録2（図3）では、読書記録1で囲んだ花の大きさと対応するように、本のおもしろさの度合いによって花の絵を貼るようにしている。図4のようにいくつかのジャンルを示しジャンルごとに色を分けておき、児童が「とてもおもしろい」と思った場合には大きな花の絵を、そうでない場合には小さな花の絵を貼る。今回ジャンルに関しては、光村図書の『こくご二上』を参考にし、「えほんやおはなし」「ちしきやしぜんのはん」「しやことばのはん」の3つのジャンルに分けた。読書記録として日付や本のタイトルを記述するだけでなく、本のおもしろさを表した花の絵を貼るという活動を行うことによって、「この木を花でいっぱいにして」という児童の外的動機付けになると考えられる（図5）。このような読

書記録は、視覚優位である自閉スペクトラム症の児童⁽²⁾に対しても有効であると考えられる。

これらの読書記録はファイルに保存していくようにする。紙で保存していくことによって、児童は学期末や学年度末に自分がどのくらい読んだのかを振り返る材料になり、「本がたくさん読めた」という達成感を感じさせることも可能だと考える。

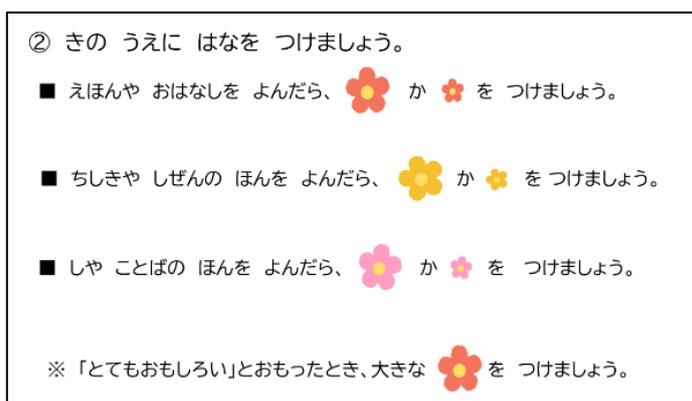


図4 読書記録2の指示文



図5 本を読み進めた場合の例

3.2 多読活動の進め方の例

多読の手順は以下の通りである。

- ① 教師が本日のおすすめの本を紹介する（10冊程度）。
- ② 児童自身に読みたい本を一冊選ばせる。
- ③ 好きな席で本を読ませる。
- ④ 一冊読み終わったら、読書記録を作成させる。
- ⑤ 本を返却させ、新しい本を選ばせる（時間内に②から⑤までを繰り返す）。
- ⑥ 終わりの時間が来たら、終了の合図を出す。

多読を実施するにあたり、児童が落ち着いて読書活動に取り組めるように教師は環境を整えることが重要である。そのため、毎回の多読活動は上述した手順で実施し、活動時には児童が次に何をするかすぐに確認できるように、手順が書かれたもの（図6）を黒板などに掲示しておく必要がある。特に記録用紙は2種類あるため、いつどの記録用紙を使うのかがわかるようにしておく。これは、ルーティンの変更や中断に対し不安を感じたり、順序づけに困難を感じたりする自閉スペクトラム症の児童⁽³⁾に対しても有効であると考えられる。

① ほんを 1さつ えらびます。

② せきを きめて よみます。

③ 1さつ よんだら、
 しろくようし1に ひづけと
 ほんの なまえを かきます。
 はなを まるで かこみます。

④ しろくようし2に はなを
 はります。

⑤ ほんを かえます。
 * また ①から はじめます。

しろくようし1

ひづけ	ほんの なまえ	おもしろさ (まるで かこもう)
		🌸・🌸
		🌸・🌸
		🌸・🌸

とてもおもしろい
 と おもったとき、
 おおきな 🌸を
 まるで かこもう。



しろくようし2



図 6 多読活動での手順の掲示物

手順①で示したように、授業の初めには教師がおすすめの本を紹介する。これは本に親しんでいない児童が、本の選択に迷うことなくスムーズに多読活動に取り組めるようにするためのものである。本を選ぶのを迷っている児童がいた場合、児童に「今何に興味があるのか」「どんなことを知りたいのか」など聞いたり、これまで作成した読書記録を参照したりして本を紹介する。もし読むことに困難を感じている児童がいた場合は、読みのサポートをしたり、場合によっては別の本を紹介したりする。

多読活動を行っている途中、児童は順番に OPAC での検索を行う。慣れるまでは教師、あるいは司書が OPAC の傍に控え、児童が OPAC を利用して本を選ぶときの支援を行う。具体的には、どのような本を検索したいのかを聞き出し、キーワードとして入力させたり、入力後の画面からどの本が読めそうかをアドバイスしたりすることが想定される。

なお、この多読活動は読書の時間に実施するが、朝読書の時間や隙間時間などを利用した授業外での読書や家庭内での読書を奨励し、読書記録の作成を継続していくことが望ましい。

4. まとめ

本研究では、日本語教育における多読の手法を用いて、ICT を活用した小学校低学年の多読活動における教材開発とその実施モデルの提案を行った。具体的には、週に1回図書室での読書時間に多読活動を行い、読書記録を作成させたり OPAC の検索指導を取り入れたりすることで、読書に対する意欲向上と読書の習慣化を図った。

多読活動では、児童は教師による図書選択の支援が受けられる状況で、各自のペースで読書を行えるようにし、毎週行う活動の内容も同じものとした。また、読書記録は文字情報より視覚情報に重きを置いたものとした。このような活動は、順序付けに困難を抱え、視覚優位という特徴を持つ自閉スペクトラム症の児童が通常学級に在籍している場合でも実施が

可能だと考える。また、多読活動自体が児童の興味関心をもとに各々のペースで進めていく活動であるため、TEACCH の教育原理の一つである「強みや興味関心を用いる（メジボフ，2007，pp.55）」ことに沿った活動であると言えるだろう。

この多読は、読書記録の内容を変えていけば、中学年、高学年でも継続して使用できる。例えば、読書記録1では、本のタイトルに加え、心に残った文章を書き出しその文章から何を考えたかを書かせることも可能であろう。読書記録2は、児童の興味・関心を可視化しているため、多読の指導において、教員は児童の興味・関心を踏まえて、アドバイスをすることができるだけでなく、児童も自分がどのような分野に興味があるかを知ることができる。さらに、このような読書記録は、小学生だけでなく、中学生や高校生においても蓄積していくことで探究活動やキャリア形成にもつなげられる可能性がある。その際、文部科学省の第五次「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(p.15)が、読書記録アプリのようなICTの活用による既存の取組の更なる参加促進を挙げているように、GIGA スクール構想による1人1台端末を活用し、コンピュータ上で読書記録を管理していけば、活用はさらに広がるであろう。

注

- (1) 例として、岡山県立図書館の「蔵書検索・予約システム」を引用した。岡山県立図書館 蔵書検索・予約システム (<https://opac.libnet.pref.okayama.jp/licsxp-opac/WOpacEsSchCmpdDispAction.do?moveToGamenId=essschcmpd#>) (2023.7.7)
- (2) 自閉スペクトラム症の人の特性については、ゲーリー メジボフ，ビクトリア シェア，エリック ショブラー (2007)，服巻 智子，服巻繁 (訳) 『TEACCH とは何か—自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ』エンパワメント研究所，46-47.を参照した。
- (3) 自閉スペクトラム症の人の特性については，同書，44-45，49-50.を参照した。

文 献

- (1) 栗野 真紀子，川本 かず子，松田 緑 (2012) 『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版
- (2) 大越 貴子 (2023) 「読解カリキュラムに組み込んだ多読授業の実践」『拓殖大学日本語教育研究』8, 105-128.
- (3) 株式会社 リベルタス・コンサルティング (2023) 「令和4年度『子供の読書活動の推進等に関する調査研究(電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査)』調査報告書」 https://www.mext.go.jp/content/20230607-mxt_chisui02-000008064_2.pdf
- (4) 熊田 道子 (2016) 「Extensive Reading (多読) の実践—「語り」から捉える読みの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』42, 111-122.
- (5) ゲーリー メジボフ，ビクトリア シェア，エリック ショブラー (2007)，服巻 智子，服

卷繁（訳）『TEACCH とは何か—自閉症スペクトラム障害の人へのトータル・アプローチ』エンパワメント研究所

- (6) 作田 奈苗（2021）「日本文化の知識を増やすことを目的とする日本語多読」『日本語教育方法研究会誌』27（1），18-19.
- (7) 笹倉 剛（監修），鶴川 美由紀（編）（2006）『子どもの心とことばを育む—読書活動実践事例集』北大路書房
- (8) 中央教育審議会（2016）「中央教育審議会答申—幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- (9) 二宮 理佳，川上 麻理（2012）「多読授業が情意面に及ぼす影響—動機づけの保持・促進に焦点をあてて—」『一橋大学国際教育センター紀要』3，53-65.
- (10) 文部科学省（2002）「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/003.pdf
- (11) 文部科学省（2018）「子供の読書活動の推進に関する有識者会議論点まとめ」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/040/attach/1402566.htm
- (12) 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東洋館出版
- (13) 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版
- (14) 文部科学省（2023）第五次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」
https://www.mext.go.jp/content/20230327mxt-chisui01-100316_01.pdf

（2023年9月16日 受理）